

## 育児ロボットって、何をするロボット？

昨日の朝日新聞朝刊2面に「家庭用ロボット 2010年にも販売 - 育児や介護、接客まで - 」と、愛知万博に楽器を演奏する二足歩行ロボットを出展した大企業が開発に着手の記事。「少子高齢化による労働力不足を背景に、特にサービス分野での需要拡大が見込まれるとの判断」からとか。

介助を頼む気遣いが少なく済むから介護ロボットはいいとしても、何も育児ロボットまでは……。

一方、飼い主を噛むペットの子犬が増えているとの最近の報道。

原因の一つとして、小さい子犬ほど売れるとのペットショップの思惑から、産まれて間もなく母犬から離され、母犬や他の犬との交流の経験がなく、ペットショップの個別の柵で育てられているからとか。

何も犬の例を持ち出すまでもなく、ネズミ、サル等の実験でも、産まれて直ぐからの親や他の仲間との交流が生きるエネルギー - としてどんなに大事かが示唆されている。

また、最近は産婦のお腹に赤ちゃんを直ぐに抱かせることさえ奨励され、また、ICUでも保育器にいる赤ちゃんとの交流が重視されている。

それは、「赤ちゃん時期の問題で、大人になってのロボットの記事とは関係ない」というだろうが、別な報道で、40年前の産院での赤ちゃん取り違えが判明し、当事者が産みの親を捜しての情報公開の裁判を起こしたニュースさえある。

第三者的には、親子共40年親子として何の疑いもなく生活してきたのだから、「今更、産みの親を詮索しても生活上の親子の関係が変わる訳でもなし……」といえる。

しかし、そこが人間！

情動的、情緒的に自らの「足場」が確定、安定しないことには、「居がい = 居場所」を感じる事が出来ず、ひいては「行きがい」を見つけられず、「居がい + 行きがい = 生きがい」がもてないという、第三者では理解しがたい人間のもつ本能、本性であり、業とでもいうことであろう。

特に乳幼児期は、親や他児との交流の中でしか自分の存在に気づき「自分育ち」がないだけに、ロボットで代用では、情動的、情緒的に足場、居場所は代用できないと思う。報道のように、大人になっても、育ての親がいてさえである。ロボット相手に、幼児は人間関係に必要な人との交流の仕方を学ぶであろうか。

まさか未来社会のある日の朝刊に、「ロボットに育児された子どもが、産みの親探し」なあって、報道される日はこないだろうなあ～。